

権威主義的態度における「静かなる反革命」の検証

——1995, 2005, 2015 年 SSM 調査データを用いて——

大阪大学大学院 松本雄大

1 目的

本研究は、権威主義的態度の時点間比較分析によって、コーホート間に特徴的な趨勢が存在していることを示す。これまでの研究では、学校教育制度（旧制／新制）の差異によって権威主義的態度の形成が説明され、旧制教育世代の退出による反権威主義化の進行が導かれた。しかし 21 世紀の日本における再権威主義化の指摘や（轟 2011）、また欧州での極右政党の台頭から権威主義が浸透しているという議論を含めると、権威主義研究は新たな局面を迎えたことになる。だが、その見解は定まっていない。一方では「人気取り政治」のような「ポピュリズム」として捉えられるが、かつてのイングルハートになぞらえた「静かなる反革命」という見方もある（Ignazi 1992）。つまり、再権威主義化がカリスマ指導者に扇動された一時的な現象なのか、価値変容を経た継続的な現象であるのかは峻別されていない。そこでコーホート分析により、日本社会の位置づけを明らかにする。

2 方法

使用するデータは、「社会階層と社会移動全国調査」の 1995 年から 2015 年までを統合したものである。従属変数は、権威主義的態度の項目群（権威・保守・委任）を単純加算・標準化した尺度を用いる。また権威主義は「安定した諸個人の心的特性」なため、年齢効果を 0 として推定した。

3 結果・考察

多変量解析の結果として、「総効果」が時代とコーホートの識別のみ、「実質効果」が学歴や年収などの社会経済的地位の影響を統制した場合のコーホート変化を図示した。すなわち旧制教育世代の権威性、新制教育世代の反権威性を取り除いたものが実質効果として現れている。いずれにしても、図 1 からは教育効果によって説明されない U 字型のコーホート変化の存在が読み取れる。したがって

現在指摘される再権威主義化は一時的な現象ではなく、コーホート間の継続的な変化にともなう「静かなる反革命」であることが示唆される。詳細な議論に関しては、当日報告にて提示する。

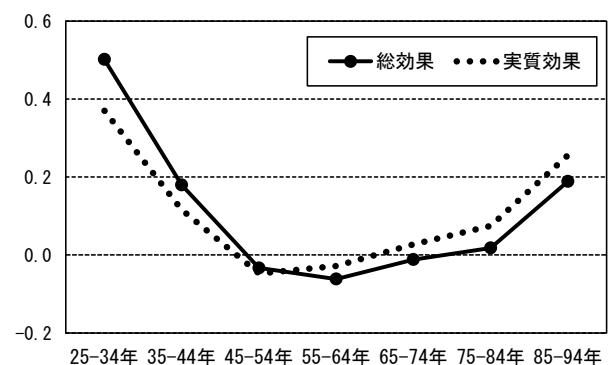


図1 権威主義的態度のコーホート変化

Ignazi, Piero, 1992, “The Silent Counter-Revolution: Hypotheses on the Emergence of Extreme Right-Wing Parties in Europe,” *European Journal of Political Research*, 22(1): 3-34.

轟亮, 2011, 「階層意識の分析枠組み——価値意識を中心として」斎藤友里子・三隅一人編『現代の階層社会 [3] ——流動化のなかの社会意識』東京大学出版会, 79-91.

〔付記〕本研究は JSPS 科研費特別推進研究事業（課題番号 25000001）に伴う成果の一つであり、本データ使用にあたっては 2015 年 SSM 調査データ管理委員会の許可を得た